

本日の学び:「煮物と長子の権利」 テキスト:創世記25章27-34節

【理解の手がかりとして】

イサクとリベカのもとに生まれる双子(エサウとヤコブ ※長子がエサウ)の話。この兄弟は成長し、エサウは野や山を駆けめぐる狩人となった。父イサクは狩りの獲物が好物だったのでエサウを愛した。一方のヤコブは天幕の周りで働くのを常とし、「穏やか」(25:27)な性格で、母リベカの愛はヤコブに傾けられた。

ある日エサウは、疲れて空腹のまま野から帰ってきた。その時ヤコブは、パンとレンズ豆の煮物を作っていた。その美味しそうな匂いに、エサウは「その赤いものを食べさせてほしい」(25:30)と懇願する。ヤコブは、かねてからエサウの持っている「長子の権利」(25:31)を自分のものにしたいと考えていたのか、好機到来とばかり、「まず、お兄さんの長子の権利を譲ってください」(25:32)と持ちかける。長子の権利とは、財産相続で他の兄弟の2倍を得る(申命記21:17)だけでなく、一家一族の支配者となり、神の祝福を受ける宗教上の特権と責任であった。

エサウは、自分の飢えた胃袋を満たすため、一杯の煮物と引き換えにこの長子の特権を譲ってしまう。そしてやがてエサウはイスラエルの正統から離れ、「エドム人」(「赤いもの」を意味するアダムに由来)の父祖となる。

この物語は、エサウがヤコブに文字通り「一杯食わされた」わけであるが、聖書はヤコブの狡猾さよりも、エサウの軽率さをより厳しく批判している。⇒「また、だれであれ、ただ一杯の食物のために長子の権利を譲り渡したエサウのように、みだらな者や俗悪な者とならないよう気をつけるべきです」(ヘブライ12:16)。

*

以上が本日のテキストの概観であるが、この部分はヤハウエ資料と考えられている。先週「ヤハウエ資料…その特徴は、人間に関心を持ち、人間の理解に深く鋭いものがあり…」と示したように、なるほど人間の有り様が実にリアルに描写されているように思う。

父親のイサクは、自分の食の好みでエサウを愛したということも実に人間くさい。一方、母リベカがヤコブを愛した理由については明記されていない。しかし彼女の中に、主から賜った言葉「一つの民が他の民より強くなり、兄が弟に仕えるようになる」(25:23)が深く記憶されていたからと推測できる。※果して、リベカは夫イサクにその主のお告げを話していたのかいなかったのか…おそらく彼女の胸の内に留めていたのだろうと思われる。

しかし双子とは言え、兄と弟の日頃の生活や性格の違いがはっきりと表れている。エサウに見る思慮のなさ、反して抜け目のないヤコブと対照的である。ちなみに、この後の創世記のエサウとヤコブの物語を読むと、イサクがヤコブにエサウの二倍の財産を与えたという記述は見られない。イサクが長子としての権利者ヤコブに与えたのは、死の床にあって目の見えなくなったイサクが、妻リベカの策略によって、エサウだと思って、ヤコブを祝福したことである。先に、「長子の権利とは、財産相続で他の兄弟の2倍を得るだけでなく、…神の祝福を受ける宗教上の特権と責任であった」と述べたが、ヤコブの身に起きていくことは、財産の文脈というよりも、むしろ「信仰の継承」と見るべきであろう。

神はこのヤコブを信仰の継承者として選んだということ。そしてそこでは部族的・民族的な系譜の主流となることが必然となるわけであるから、その大目的たる「信仰の継承」という視座の中で、この物語を読むこと、「長子の権利」を継ぐヤコブの物語を理解することが肝心であろう。

あるコラムを紹介する。「ヤコブはそのときは、長子の権利とは、財産を二倍継承できる権利だと考えていたのではないかと思います。しかし実際には、アブラハム、イサクと続いた信仰を継承する役目が長子の権利に伴う義務でした。そこに、主の大きなご計画があったと考えます。このように、人間のそのときどきの思いを利用しつつ、主はご自分の計画を成就していかれるように思います。ヤコブはきっと後に次第にそのことに気付いていったのではないのでしょうか。私たちにも同じように、自分の想いで動いていたことが、後にあって主のご計画のもとで動いていたのだと気付くことがあります。」(加納貞彦)

「長子の特権」としてヤコブが継承していく「信仰」者の歩み、そこに待っているものは決して簡単なものではない。ヤコブに関して「穏やかな」と訳されたヘブライ語タームは『聖書教育』では「無垢な」と説明されている。このタームという単語はヨブ記でも信仰の人ヨブを形容する言葉として用いられている(ヨブ記 1:1, 1:8, 2:3 など)。しかしそのヨブは、まさに「苦難の人」であった。

「穏やか」「無垢」なる人が、そうであるがゆえに味わう苦しみがある。ヨブはその苦難の中で問い続ける。しかしその最終章にて次のように告白する。「あなたは全能であり、御旨の成就を妨げることはできないと悟りました。…わたしには理解できず、わたしの知識を超えた驚くべき御業をあげつらっておりました。…しかし今、この目であなたを仰ぎ見ます」(ヨブ 42:2-5)と。

そう、大切な事は主の救いの計画(それは個々人を越えた全人類規模のスケール)、御旨の成就である。人間の物語には様々な思惑が絡み合い、決してきれい事では進まない。しかしそんな人間模様を用いつつ、主の御手による計画が進められているということを信じる事、それが私たちに希望を抱かせ、信仰者としての人生を逞しくさせ、またしなやかにさせるのではないか。

『聖書教育』より…「ヤコブの物語は息子ヨセフの物語へと繋がってゆきます。理不尽な出来事を通らされた人を、神は真に不思議な計らいで悪を善へ、そして多くの民の救いのために用いられます。主は嘆きの中にいる方を大いなる憐れみで施し、大切な慰めの器としてくださるのです」(7/8「毎日のみことば」より)。